

## 経済学部 新教育プログラムの模索 Global Practical Economist の育成へ向けて大きく舵を切る！

研究科長  
あいさつ

福原 宏幸（経済学研究科長）

大阪市立大学経済学研究科は、さまざまな学問的背景を持つスタッフを揃えており、経済理論・思想から経済分析、経済政策、国際経済学など多様な学問的アプローチを展開しています。経済学部の教育においては、こうした特徴を生かし、スペシャリストではなくジェネラリストの輩出をめざしてきました。多様で不確実性が増す現代社会が直面する課題を的確に捉え、それを経済学の素養を生かして分析し、解決の方途を他者との対話と協働により複眼的な構想力を持って立案し解決することができる Practical Economist の育成が重要と考え、独自の教育プログラムを展開してきました。

しかし、現代社会は、グローバル化によって多様性と不確実性がますます高まり、多様性の相互理解がいっそう必要とされるようになってきました。このような時代の要請に対応しうるグローバルな視野を身につけた学生を育成すべく、経済学部のベースにあるジェネラリスト教育と少人数教育の場において、教育プログラムを一新し、強化することをめざします。このプログラムにおける軸として、文化・社会・

伝統等の多様性への理解と、グローバルな文脈における判断・討論・合意形成・制度設計に関する能力育成を位置づけています。

この新しい教育プログラムは、三つ部分から構成されています。第一は英語による専門科目の講義群の提供であり、2016年度は7科目を提供します。第二は、1年生の基礎演習から始まる少人数ゼミナールにおいて段階ごと演習クラスを設けてグローバルな視野をもつ Practical Economist 育成をめざすプログラムを開始します。そして第三に、Global Practical Economist という目標達成を指標ごとに数値化し、その指標を使って個々の学生たちの到達度を計測して成績評価に生かすこととしています。このほか、英語チューターを配置し、学生に対する学習サポートを実施します。2016年度はひとまず試行的にこれらのプログラムを実施し、2017年度から本格的な実施を行う予定です。

このように、経済学部は、新たな教育プログラムの実施へ向けて第一歩を踏み出します。



### <プロフィール>

兵庫県淡路島生まれ。大阪市立大学経済学部卒業。大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得退学。経済学博士。

労働経済論・社会政策専攻。

著書に、編著『社会的排除/包摂と社会政策』法律文化社、共編著『ユーロ危機と欧州福祉レジームの変容：アクティベーションと社会的包摂』明石書店など。



## 新教育プログラム

### Global Practical Economist (GPE) の紹介

中村 英樹(経済学研究科教授)

#### 1. GPE プログラムで目指すこと

新教育プログラムでは、単なる英語教育の重視ではなく、グローバルな視野を身に着けるための外国語教育(現実的には特に英語教育)を心掛けます。そして、英語による直接のインプットによる理解と自らの考えのアウトプットができるようになるため技術として英語教育を利用します。

#### 1.1 GPE プログラムにおける講義科目

経済における様々なトピック(日本・アジア経済研究を含む)を英語により提供します。

経済英語 1, 経済英語 2, Global Economy, Introduction to International Economics, Lectures on Economics A, Lectures on Economics B, Computational Economics

#### 1.2 GPE プログラムにおける少人数ゼミナール

経済学の知識と考え方を生かし、英語によるインプットとアウトプットができることを目指します。以下、段階(A,B,C)別に3タイプの演習を新設します。(図1をご参照ください。)

(A) 基礎演習(G: グローバル教育仕様): 社会経済の様々なテーマにおいて分析の仕方を学ぶ中で、部分的に英語の文献をサーベイできることを目指す演習です。従来の基礎演習のなかに新設します。

基礎演習(G: グローバル教育仕様)であり、学生数は12名とします。経済学部生1年のみ対象です。2015年度は1クラスとし、需要があれば増やしていきます。なお、指導は日本語で行います。

(B) (i) Innovative Workshop (G: グローバル教育仕様): 社会経済の様々なテーマにおいて、グループワークのもと研究発表を行うが、最終的に英語のプレゼンを目指す演習です。従来のIWの中に新設します。

1クラス12名とします。Innovative Workshop (G: グローバル教育仕様)において、クラス同士による英語での発表会を行います。質問とコメントは日本語でも構いません。ま

た、指導は日本語で行います。

(B) (ii) Economic Reading: 社会経済の様々なテーマを外国語文献によって学習するなかで、Reading・Writing能力を重点的に伸ばす演習です。新設の演習です。

1クラス20名程度とします。(現)論文演習の代替を想定し、(旧)外書講読を発展させた演習です。英語を優先するが、他言語(ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮・韓国語)での演習も検討します。

(C) Workshop on Economics: さらにレベルを高くし、全て英語で経済・社会に関する議論ができることを目指す演習です。新設の演習です。

1クラス10名程度のもと、1クラスのみを提供します。ある一定水準の英語能力を満たす場合のみ、受講可能とします。実質的には少人数ゼミナールですが、形式的には講義科目です。なお、学生間の積極的な議論を要求するため、英語能力を満たせば、他学部生の履修を認めます。

#### 1.3 目標達成の数値化とサポート体制

##### 目標達成の測定:

目標達成を数値化します。その測定は、現在行っているPE指標をベースに、上記の新教育プログラムを加味した指標を作り達成度を測ります。そして、優秀者を卒業時に表彰します。

##### サポート体制:

現在、2人の英語のチューター Parasさんと Allen Peytonさんが学習相談室にいます。宿題の援助だけではなくFree discussionやReading practiceなど何でも大丈夫です。チューターの利用可能日時は、ポータルサイトで発信する予定です。

#### 2. 海外大学との提携と交流

IW(G), Workshop on Economicsや専門演習3,4では、海外大学との合同ゼミやフォーラムにおけるプレゼンや議論の実践を推奨します。具体的には、吉林大学(中国)と全南国立大学(韓国)とのフォーラムは学生間の学術交流を重点的に行います。さらに、De La Salle University, Philippinesとの合同ゼミなどを想定する。また、海外大学との教員間の研究交流も合わせて進めていきます。



図1. 新設した少人数ゼミナール履修の流れ

## 吉林大学における三大学シンポジウム

久保 彰宏 (経済学研究科准教授)

平成 27 年 9 月 16 日水曜から 19 日土曜までの行程で、三大学国際シンポジウムに参加するため、中国の吉林大学(吉林省長春市)に行ってきました。経済学研究科では、平成 21 年より韓国・全南国立大学、中国・吉林大学と、三大学国際シンポジウムを毎年開催しています。教員間ならびに学生間の学術交流を目的とし、特に参加学生の研究報告のレベルは非常に高いことが特徴です。今年度の本学参加者は教員 2 名と学生 8 名でした。

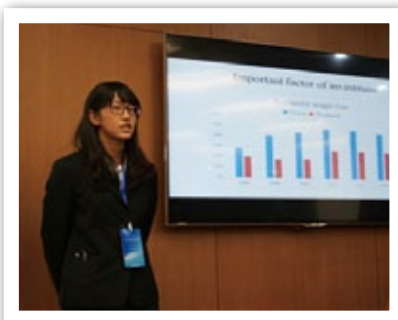
(教員) 中村英樹教授、久保彰宏准教授

(学生) 大槻一貴、小川裕大、徳永夏音(以上、中村英樹ゼミ)  
江角香菜、大内駿平、加藤拓磨、鈴木麻衣奈、松本照矢(以上、久保彰宏ゼミ)

では、スケジュールとともに参加内容を紹介します。

### 16日 日本出国

午前中に関西空港から出国、韓国の仁川国際空港にてトランジット、夕方に長春国際空港より中国へ入国しました。仁川での乗継時間が長く、時間を潰すことが大変かと思いきや、学生は翌日の研究報告準備に時間が取れて、結果的にはよかったのかもしれない。長春国際空港には吉林大学の学生が迎えに来て、大学所有のミニバスにて宿泊するホテルへ移動しました。ゲスト校である全南国立大学と本学は同じホテルに宿泊、教員は高層階に一人一部屋、学生は二人一部屋での割り振りでした。異なる大学の学生と同室になるケースもあり、学生間の交流は 24 時間といったところでしょうか。ホテルは吉林大学に至近の立地で、近くには商店がたくさんあり、夕方以降は買物や食事をする吉林市民の生活を目にすることができました。夕食は吉林大学経済学研究科の Li Xiao 副研究科長主催の歓迎会としてホテルのホールで食べきれないほどの中華料理を頂きました。各大学の学生は飲食中にそれぞれの教員からいきなりスピーチを振られるなど少々厳しい洗礼を受けつつも、大学間交流は初日から非常に盛り上がっていました。そんな楽しい夕食会の後でも、本学学生は翌日の報告についてそれぞれ最終確認を行っていたようで、頼もしい限りでした。



### 17日 シンポジウム参加

朝 8 時半よりシンポジウムの開会式があり、まず昼食を挟んで 3 つの教員セッション、その後 3 つの学生セッションが夕方までぎっしり。一セッションは 3 本の報告ですので本当に盛りだくさんです。報告する教員と学生に加えて吉林大学の学生が学年を問わず聴講しに来ており、会場は常時 60 人ほどで埋まっていました。今回の共通テーマは Economic Development and Infrastructure Construction in East Asia でした。第一教員セッションの最初に私が報告、第二教員セッションでは中村英樹教授が報告、私が討論者として参加しました。昼食を大学が持つ国際交流会館にて中華料理を食べた後、第三教員セッションを経て学生セッションに入りました。第一学生セッションで久保彰宏ゼミの大内駿平、鈴木麻衣奈、松本照矢のグループが“Next-generation Industries in East Asia’s Megacities”というテーマで、第二学生セッションで久保ゼミの江角香菜と加藤拓磨のペアが“Business Risk of Foreign Direct Investment”というテーマで、最後に第三学生セッションで中村英樹ゼミの大槻一貴、小川裕大、徳永夏音のグループが“Can Less-developed Economies Benefit from The AIB?”というテーマでそれぞれ報告しました。なかでも、久保ゼミの大内駿平、鈴木麻衣奈、松本照矢のグループによる報告は、特に松本くんの捨て身のプレゼンが功を奏し、会場を盛り上げました。また、鈴木さんは第二学生セッションの司会を、大内くんは第二学生セッションの討論者を、加藤くんは第三学生セッションの討論者をそれぞれ務め、無事に大役を果たしてくれました。閉会したのが 18 時前とかなりの長丁場でしたが、学生同士お互いの報告内容やレベルに関心があったようで、最後まで集中して報告に耳を傾けていました。閉会後も学生間では報告テーマ内容について質疑が継続、学生の報告に教員が詳しくコメントしたりと、有意義なシンポジウムになりました。



以下は、報告を終えた学生の感想です。

- ・ 報告の完成度も重要だが、いかに簡単な言葉で手短かに言うかが重要
- ・ 質疑応答、特に日本人学生は返答する語学力の準備が最も大切
- ・ 事例をあげる際に、聴衆の文化や環境などに配慮することが大事

実際、私のゼミでは、参加学生たちが音頭をとり毎週ゼミ終了後に英語による討論会を自主的に開催しています。今後の課題を新たに見つけ、それに取り組む、このシンポジウムから得られるメリットの一つかもしれません。

夕食はシンポジウムの打上げの意味もあり、初日に続き、ホテルのホールにて夕食会が開催されました。またもや食べきれないほどの中華料理の数々、しかし昨夜とメニューが異なっているのでどれもまったく飽きずに食べることができました。メインのイベントが終了してホッとしたからか、学生たちの交流もどんどん深まっていったようです。



## 18日 ホスト校主催イベント(エクスカージョン)

午前中に長春映画製作所(旧満州映画協会)の歴史館展示物を見学、昼食には北朝鮮料理店にて冷麺を、噂の(?)音楽演奏も見ることができました(吉林省は古くから北朝鮮と交流があります)。午後は長春世界彫刻公園にて散策、最後に大型スーパーにてお土産などを買いに行きました。その後、本学は翌日帰国するため、今回最後の夕食会に参加しました。会場は昨日一昨日と同じく滞在ホテル内で、またもや食べきれないほどの中華料理が出てきました。

しかし、昨日までは鳴りを潜めいていた東アジアスタイルでの交流がとうとう！酒に始まり酒で終わる、今の日本の事情からするとありえない状況ですが、郷に入らば何とやら。中国、韓国の先生方は飲む量も飲み方も半端ではなく、教員のテーブルでは激戦が繰り広げられ、…がんばりました！一方、学生たちも交流がますます深まっており、意気投合し二次会に近場のローカル居酒屋へ出かけていったようです。

## 19日 帰国

午前中に長春国際空港から出国、またもや仁川国際空港でトランジットです。往時と同様、長い待ち時間があり、さすがに今回は学生も時間を潰すことがかなり辛かったようです。夜、無事に関西空港へ到着、帰国となりました。

以上、スケジュールと参加内容を報告しましたが、このように、国際シンポジウムは学生たちにとって英語による学術的コミュニケーションの準備・実践を行う絶好の機会となります。本学経済学研究科は、このシンポジウムを教員の国際的研究交流とあわせて、学生のグローバル教育の一環と位置付けています。来年、平成28年度は本学においてこのシンポジウムを開催します。学生諸君の積極的な参加を期待しています。



## フィリピン・マニラ研修旅行

脇村 孝平(経済学研究科教授)

昨年の9月21日から25日の期間、私が担当する専門演習のゼミ生10人とともに、フィリピンのマニラを訪れた。三年前に、「海外研修ゼミ旅行」と称して、アジア諸国を訪れることを始めたが、台湾・ベトナムに続いて、今年で三回目の研修旅行となる。この時期を選んだのは、同僚の中島義裕先生が、マニラにあるデラサール大学に滞在していることが大きかった。中島先生は、同大学の経済学院の教室と我が学部の教室をスカイプで繋ぐ実験的な二元授業を行うために、滞在されていたのである。

私たちは、マニラでは、三つの活動を行った。第一は、工業団地の見学である。マニラ郊外にあるファースト工業団地(First Philippine Industrial Park)を訪れることができた。ここは、住友商事が運営する工業団地で、多数の日系企業が進出していた。その中でも、私たちは、村田製作所の現地工場を見学することができた。高い技術水準を維持しつつ、現地の諸条件に適応しようとする会社の努力に強い感銘を受けた。第二は、デラサール大学を訪問し、学生間の交流を行ったことである。この大学は、フィリピン有数の名門私立大学である。我がゼミ生たちは英語による拙い研究発表を行ったが、デラサールの学生たちは、その後の学生間の懇談会も含めて、極めて友好的に接してくれた。中島先生の根回しがあってこそその話であるが、総じて温かいもてなしを受けた。第三は、マニラ湾に浮かぶ小島コレヒドール島へ行き、戦跡めぐりを行ったことである。ここは、先の大戦中、日本軍と米・比軍との間で激戦が行われた地であった。この島における事跡に疎かった私たちにとっても、戦争のことを考える良い機会になった。

この研修旅行の趣旨は、学生たちに少しでもアジア諸国に馴染んでもらおうというシンプルなものだった。今年のゼミ三回生のうち、海外旅行経験者は半分を切るし、アジア諸国を訪れたことのある者は、さらに少ない。しかし、これからの日本経済の行く末を考えると、アジア諸国に展開する企業数はさらに増えるだろうし、ゼミ生の中の何人かはアジア諸国との関わりを持つかもしれないなどと事前に考えたりした。帰国後の学生の反応は、概ね好評であった。この眼で現地を見て、そこの空気を吸うことは、百万言の言葉よりも有意義なこともある。

実は、来年も、新ゼミ生とともにマニラに行き、デラサール大学で再度、学生間交流を行うことを計画している。今度は、中島ゼミとの合同のマニラ研修旅行を考えている。



## 留学生紹介

ROMIC Ivan さん

I come from Croatia, a country at the crossroads of Central Europe, Southeast Europe, and the Mediterranean. Croatia is the most recent member of the European Union, having joined in July 2013. I graduated with a master's degree in International Economics and European Union Integrations in January 2013. I joined Graduate School of Economics of OCU in October 2013 as a research student, and from April 2014 I am enlisted as a doctoral student. Under supervision of Professor Yoshihito Nakajima, I study the dynamics of the complex adaptive systems. Using agent-based modelling and computer simulation, we research how interactions between agents following simple rules emerge into complex dynamics and macro behaviour. Currently we are working on an agent-based model of ecosystem engineering in natural and social systems. Ecosystem engineers are organisms that directly or indirectly modulate the availability of resources to other species, by causing physical state change in biotic or abiotic materials, thus creating, modifying and maintaining habitats. By increasing the heterogeneity of the habitat they positively affect species richness. Furthermore, they have a profound influence on macroevolution, one of the examples being the triggering of chemical and climatic changes that led to the end of the so called "Boring Billion" period, setting off the Cambrian explosion. We can argue that ecosystem engineers are the most potent source of evolutionary innovation in the natural systems. If we want to find similar dynamics in the social systems, we can observe the explosion in complexity and diversity of human organizations that happened quite recently in the history of society, beginning with the Industrial Revolution. Using New Institutional Economics demarcation between institutions and organizations, where institutions are "rules of the game" and they determine what is possible and not possible in the environment; and organizations are groups of people that behave within institutional rules to achieve their goals, we can argue that some organizations have greater influence on the institutions than other organizations. Therefore, macrodynamics of the social systems is influenced not only by evolution of ecosystems of organizations, but also by coevolution of organizations and institutions. To explore that kind of coevolutionary processes, we implement ecosystem engineering thinking in our model and hope to explain how the presence of ecosystem engineers in the system affects patch creation, diversity, and macrodynamics, with special focus on ecosystem engineer (and its equivalent in the social system) as an innovator and force of endogenous change in the environment. As we can see, studying complex adaptive systems requires interest and research about both natural and social systems and it is often required to have knowledge about other fields of science. It is very challenging, but intellectually rewarding work.



4月から教授に就任する先生方にインタビューしました。

## 浦西秀司先生：産業経済論

### 1. 簡単な自己紹介をお願いします。

1972年生まれ、大阪府豊中市出身です。大学入学以降は神戸で過ごし、その後、最初の赴任校がある広島県福山市で9年間過ごしました。2013年、大阪市立大学への着任にともない、大阪へ戻ってきました。性格はきれい好きで、整理整頓が得意です。趣味はドライブ(かつてはツーリング)です。学部の時からオートバイが大好きで、前任校では大型バイクで通勤していましたが、現在は自動車で近畿一円の温泉と名物料理(蕎麦かコンニャク、川魚など)を楽しんでいます。

### 2. なぜ、研究者を志されたのでしょうか？

最初は身の回りにあるカメラやオーディオ機器、コンピューターなど、「モノ」の仕組みに興味があり、将来はこれらに関係する仕事に就ければと思っていました。ところが、大学で経営学を学んでゆくにつれ、「組織」や「社会」の仕組みにも興味の対象が広がり、いつしか社会科学の研究者を志すようになりました。また、私は中学・高校時代、あまり勉強が好きではなかったのですが、大学でたまたま入ったゼミ指導教官の研究アプローチが私の性格に合っており、学部および大学院での勉強を「楽しい」と思えたことも、研究者を目指すきっかけとなりました。

### 3. どういった研究をされていますか？

交通・公益事業を対象とした規制政策の研究をしています。これらの産業では事業者が日常生活に必要な財・サービスを提供していることから、料金規制や参入規制など、国によって経営上の様々な規制が課されています。これらの規制政策に関連し、規制緩和や民営化が事業者の生産性に与える影響や、産業の費用特性から見た現行政策の合理性などについて、事業者の財務・経営データを用いた計量的手法による分析に取り組んでいます。

### 4. 研究の面白さを教えてください。また、しんどさはありますか？

私は実際のデータを使って様々な計算をすることが好きなのですが、研究の面白さは、数年に1回のタイミングで、とても興味深い研究テーマとめぐり合った時にワクワクするような計算ができることです。一方、しんどさは、何かを明らかにしたくて研究テーマに取り組むのですが、たいていの場合、得られる結論は限定的であり、かつ、分析の過程でさらなる課題

が見つかってしまうので、いつまでたっても終わらないことですね。

### 5. 最近の業績3点を挙げてください。

Fumitoshi Mizutani and Andrew Smith, Chris Nash, Shuji Uranishi (2015) "Comparing the Cost of Vertical Separation, Integration, and Intermediate Organisational Structures in European and East Asian Railways," *Journal of Transport Economics and Policy*, Vol. 49, No. 3, pp. 496 - 515.

Chris Nash and Andrew Smith, Didier van de Velde, Fumitoshi Mizutani, Shuji Uranishi (2014) "Structural Reforms in the Railways: Incentive Misalignment and Cost Implications," *Research in Transportation Economics*, Vol. 48, pp. 16 - 23.

Fumitoshi Mizutani and Shuji Uranishi (2013) "Does Vertical Separation Reduce Cost? An Empirical Analysis of the Rail Industry in European and East Asian OECD Countries," *Journal of Regulatory Economics*, Vol. 43, No. 1, pp. 31 - 59.

### 6. 学生へメッセージをお願いします。

4年間という限られた時間を、勉強はもちろんのこと、それ以外にもサークル活動やアルバイトなどにどの程度配分するのかについては、人それぞれ考え方があってと思います。ありきたりで恐縮ですが、4年間はあっという間に過ぎてしまいますので、卒業時に後悔することが無いよう、自らの満足を最大化するような時間配分を見つけて下さい。

(インタビュー：中村 英樹)



## 若森みどり先生：経済学説史

### 1. 簡単な自己紹介をお願いします。

1973年生まれで大阪府豊中市出身です。大阪市立大学の経済学部を卒業して、大学院から東京で過ごしました。20年近くを過ごして2年半前に大阪に戻り、母校の教壇に立つことになりました。地元に戻ってきたので懐かしい友達と再会したり、生活のリズムが豊かになりました。趣味は完全なインドア派で、静かに集中して本を読む時間、長年一緒に暮らしてきた小鳥とまったりくつろぐ時間が至福の時です。

### 2. なぜ、研究者を志されたのでしょうか？

女性として経済的に自立できる職業は何か、体力の少ない自分でも働き続けられる職種は何か、大学2年生の時にかなり悩み抜きました。バブルが崩壊し、一年上の女子学生の就活に与えた厳しい影響(男子学生はそれほどではなかった)を目撃しました。また、時代はそれまでの経済への<熱狂>から覚めて大きく変わっていくのを実感しました。個人としては、時代に適合して走りつづけるというよりは、どんな時代に变化していくのか見届け捉えることを仕事の一部にしたい、と思いました。東西冷戦終結後の日本のハイエク・ブームに影響された3年生の時、ハイエクの「真の個人主義と偽の個人主義」という1940年代に書かれた名論文を読みました。ハイエクに魅了されながらもその市場秩序賛美の主張に対する深い懐疑が私のなかに芽生えて、研究者への道が現実的な進路になりました。

### 3. どういった研究をされていますか？

カール・ポランニーというハンガリー出身の社会科学者の経済思想史研究を続けてきました。一瞬のうちに膨大に出てきては消えていく情報、知識社会のなかで、何十年、何百年と残りつづける名著(古典)がありますが、ポランニーの大著『大転換』(1944年)もそれに該当します。経済学説史と政治経済学を担当することになったことも影響して、現在は、市場社会論の研究(と教育)にも取り組んでいます。

### 4. 研究の面白さを教えてください。また、しんどさはありますか？

経済思想史研究のなかに20世紀前半の諸思想が組み入れられるようになったのは、この十数年です。研究に打ち込んでみると、未踏の領域に足を踏み入れて自分で新しい地図をつくっていくような冒険心というか、独特の充足感と躍動感を

もらいます。ただ、考えたり感じたり発見したことをつなげて形にして実らせるまではしんどいです。昼夜問わず研究の内容が気になって頭から離れない時は気分転換がうまくできないですし、見通しがもてなくなって途中で心が折れてしまいそうになることや、理解してくれる人がいなくて孤独なことなども当たり前。しかし、やっと形にして(書いて)世に送り出すことができれば、その後、何十年かが経ち、自分がこの世にいないようになってからも、誰かが図書館や本屋で読んでくれるかもしれせん。まだ見ぬ若い世代の研究者や新しい世代の人びとにバトンを渡す精神のリレーに参加しているような、神聖な感覚を頂戴して、幸せな瞬間もあります。

### 5. 最近の業績3点を挙げてください。

『カール・ポランニーの経済学入門——ポスト新自由主義時代の思想』平凡社、2015年。

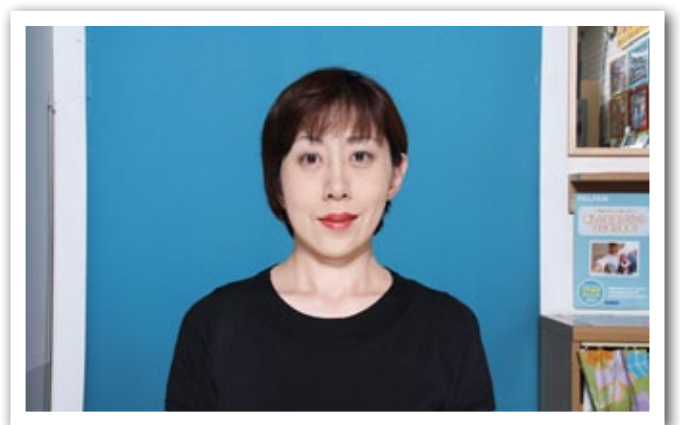
「贈与——私たちはなぜ贈り合うのか」橋本努編『現代の経済思想』勁草書房、2014年。

『カール・ポランニー——市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版、2011年。

### 6. 学生へのメッセージをお願いします。

今年のベストセラーの一つだった『嫌われる勇気』(アドラー心理学)や、ダウンシフターズ(新しいライフスタイル)、機械との競争、現代幸福論などのテーマなど、ゼミや授業の場で学生さんから、教わりました。皆さんが日頃、日常生活のさまざまな局面で感じていること、理不尽だと思うこと、おかしいと思うこと、こうしたらよくなると提案したいことなどを、どんどん表現してってください。それは新しい時代をつくり、社会をつくっていくことに繋がります。表現するためには学問が役に立ちます。また、さまざまな本を自由自在に読めるようになる、なかなか言語化できなかった、自分のなかにあることを表現する方法が見つかっていきます。

(インタビュー：中村 英樹)



## 教員の著書出版と社会貢献

### 著書：

田辺明生・杉原薫・脇村孝平共編著『現代インド1 多様性社会の挑戦』東京大学出版会、2015年2月。

中嶋哲也著『経済発展と格差—簡単な家計モデルによる検討—』現代図書、2015年8月。

福原宏幸・中村健吾・柳原剛司編著『ユーロ危機と欧州福祉レジームの変容：アクティベーションと社会的包摂』明石書店、2015年8月。

若森みどり著『カール・ポランニーの経済学入門—ポスト新自由主義時代の思想—』平凡社新書、2015年8月。

### 社会貢献：

小川亮

アジア太平洋研究所「関西2府4県別GDPの早期推計(2013-14年度)及び超短期予測」

滋野由紀子

大阪市外郭団体評価委員会委員  
大阪市男女共同参画審議会委員  
大阪市入札等監視委員会委員  
大阪府都市計画審議会委員  
大阪府国土利用計画審議会委員

杉田菜穂

国立社会保障・人口問題研究所創立記念事業外部委員  
大阪市市民局雇用施策業務委託受託事業者選定会議委員  
大阪市雇用施策懇話会委員

長尾謙吉

大阪市都市計画審議会委員  
大阪市道頓堀川水辺空間利用検討会委員  
大阪労働局最低賃金審議会委員

橋本文彦

大阪市住吉区区民意識調査受託業者選定委員会委員長

福原宏幸

公益財団法人社会福祉振興・試験センター 社会福祉国家試験幹事委員  
大阪府・市町村就労支援事業推進協議会委員  
箕面市生活困窮者自立支援事業推進協議会座長  
八尾市同和問題委員の会議座長  
大阪府済生会人権・人材養成研究所運営委員会委員

脇村孝平

福岡アジア文化賞選考委員

## 優秀卒業論文(2014年度卒業生)

植田康平「少子化は、個人の選択か？社会の責任か？」

佐田晴香「村おこしの成功と住民の幸福度—高知県馬路村のアンケート調査—」

瀧本真微「ひとり親家庭の自立支援史とその現段階—社会背景による支援方針の変化を中心に—」

三浦未暖「SPA企業の自社グループ化の度合いとSPAの三大メリットの関係性—ZARA、H&M、UNIQLOを事例に—」

四辻裕貴「路面電車存廃を分けた要因に関する考察—仙台市と広島市を比較して—」

ニューズレターへのご感想、ご意見などをお寄せ下さい。  
お寄せ下さった方には粗品を進呈します。

大阪市立大学 大学院経済学研究科・経済学部  
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138  
TEL: 06-6605-2251 FAX: 06-6605-3065



編集委員一覧

中村英樹 (広報委員長)  
若森みどり、杉田菜穂 (広報委員)